

“外来魚駆除システムと成果—犬山市における実験”

近年ため池ではブラックバスやブルーギルがいたるところに放流され、在来生物種が駆逐され、同時に貴重種や希少種が絶滅ないしはその危機に瀕している。生物種の生息環境を保全していかなければならない。このためには在来種特に魚類や二枚貝の生息を外来種とりわけ特定外来生物であるブラックバス、ブルーギルの影響から一時避難させ、もとの生息環境を取り戻した後に戻すことを実験してきた。この経過や手法・実施システム、成果を紹介したい。

「おさかなレスキュー」の経緯

- ・ 2001 年市内のため池に絶滅の危機に瀕する貝類（二枚貝類）の生息が確認された。
この保全に向けて水生生物調査をしたところ、市内のため池にはすでにオオクチバスやブルーギルが繁殖している実態が判明、緊急に対応する必要があった。
- ・ 2002 年本格的な池干しと「おさかなレスキュー」が実験的に開始された。
対象として選んだ池は二枚貝の生息が確認され、外来魚による影響が憂慮される中島池と新池とした。
以降「おさかなレスキュー・外来魚駆除活動」が継続されていった。

年毎の池干し

- ・ 2005 年度から活動は本格化し、以降今日まで毎年行われている。
- ・ 数多いため池の中で一定程度の大きさを持つ対象を設定し、順次結果を確認しながら対象池を増やしていった。

実行システム

社会的研究システムの構築

市民活動団体による人手の確保とともに、大学や試験研究機関との連携が必須であり、さらに池守や行政との連携も図らなければならない。きわめてシステムチックな研究構造となる。

→行政、NPO 研究所、池守、地区役員、大学、小中学校、市民ボランティア組織
技術システムの確立

かつてのように地元で年中行事として池干しが実施していた時代とは異なり、現在では目的も技術も異なっている。担い手も違う。この変化に即して「池干しの技術システム」を編成しなければならない。

→水抜きに伴う魚類や個体数把握技術、捕獲技術、水門管理技術、分類・計測技術
装備調達と配備技術、作業の分担・統括技術、結果の集約技術

成 果

- ・ 池干しの継続によりオオクチバスとブルーギルの個体調整が可能になることが判明したこと。
- ・ 社会的・技術的両面にわたる「再現性のあるシステム編成」ができたこと。